

資料紹介

## グリーンズパンの記念講義「アダム・スミス」の翻訳と解説

村 井 明 彦

はじめに

- I アラン・グリーンズパン「アダム・スミス」
- II グリーンズパンのスミス論の特徴と思想的背景  
おわりに

### はじめに

前連邦準備理事会（FRB）議長グリーンズパンは、任期17年目の2005年にエディンバラ大学から名誉博士号を授与され、前日の2月6日日曜日にはカーコーディで「第14回アダム・スミス記念講義」を行っている。

舞台が大学のあるエディンバラではなくフォース湾を挟んで対岸にあるカーコーディになったのには、単にそこがスミスの生誕地だからという以上の理由がある。名誉学位授与を斡旋したのは、当時のイギリス財務大臣（在任1997～2007年）ブラウン（Gordon Brown 1951-）である。彼はグラスゴウ郊外のスコットランド教会牧師の家に生まれるが、少年時代をカーコーディで過ごし、カーコーディ高校から16歳でエディンバラ大学に入学する。スミスは14歳でグラスゴウ大学に入学しているが、実はそれまで通っていた学校がブラウンの高校の前身であるカーコーディ市立学校なのである（創立は1582年）。つまり、スミスはブラウンの高校の大先輩であることになる。ブラウンは大学で大恐慌までの労働党史の研究を進め、のちに政界入りする。さらに、彼を財務大臣に指名した首相ブレア（Tony Blair 1953-）もエディンバラ生まれである。このような縁の中、スミスも創設者の一人となったエディンバラ王立協

会（Royal Society of Edinburgh: RSE）が主催した講演に招かれたのである<sup>1)</sup>。講演はブラウンの父が牧師をつとめる聖ブライス教会（St. Bryce Kirk）で行われた。2月5日土曜日にロンドンで開催されたG7でブラウンと顔を合わせたグリーンズパンは、その足でスコットランド入りし、上記スケジュールをこなした模様である<sup>2)</sup>。ブラウンは労働党員ながら財務大臣時代を含めて規制緩和を推進する「ニューレイバー」路線をとったが、こうした政策上の問題に関してグリーンズパンの助言を求めるようになり、ワシントンにあるFRBのオフィスに彼を訪問したこともある<sup>3)</sup>。

1) RSEの機関誌が伝えるところでは、同協会はフランクリン、ファラデー、カーライル、テニソン、ハクスリー、J. S. ミルなどの歴史的人物のほか、アマルティア・センなども会員である。また、講演に資金を提供したのはスコットランド銀行（The Bank of Scotland）である。The Royal Society of Edinburgh, *ReSource*, vol. 11, Spring 2005, p. 5, <http://www.royalsoced.org.uk/cms/files/publications/ReSource/spring05.pdf>

2) グリーンズパン訪英を伝えるイギリスの報道の例を挙げておく。Ashley Seager, “Greenspan Hails Adam Smith,” *The Guardian*, Monday 7 February 2005, <http://www.guardian.co.uk/business/2005/feb/07/politics.economicpolicy>

3) のちにふれるが、グリーンズパンは主著『波乱の時代』で本資料の一部を抜粋したものと思われるスミス論を展開しており、ブラウンとの交友についてもふれている。山岡洋一・高遠裕子訳『波乱の時代——世界と経済のゆくえ』（下巻）、日本経済新聞社、2007年、17-25、47-48ページ。なお、原書（Alan Greenspan, *The Age of Turbulence:*

グリーンズパンは学者ではないが、その経済学理解は緻密であるとともに独創的で、本資料は現役の(当時)中央銀行トップのスミス論として注目に値するものである。その独創性についてはのちに論ずることとし、まずはグリーンズパンの言葉に耳を傾けていこう。

## I アラン・グリーンズパン「アダム・スミス」<sup>4)</sup>

カーコーディ、それは1723年にアダム・スミスが生まれた地であり、ひいては現代の経済学が生まれた地でもあります。またもちろんのこと、貴国の財務大臣が育った地でもあります。この地域は知性をはぐくむ空気を発散していますが、私は財務大臣の経済や金融の誉れ高い技量がどの程度までその所産なのか、じっくり考えているところです。

\*\*\*

歴史をざっと眺めてみると、重要なのはまさしく思想です。実際、思想以外に世界を支配するものなどほとんどありません。ジョン・メイナード・ケインズが次のように述べたことはよく知られています。「自分は実利的な人間だから知的なものには影響を受けていないと信じている人たちも、いまは亡き経済学者の奴隷であるのがふつうである。権力をもちながら天声を語ると称する狂人たちも、数年前の三流学者からおかしな見方を吹きこまれているのであ

る<sup>5)</sup>」。皇帝や軍隊が、次から次へと現れては去ります。けれども、彼らは歩んだ道に新たな思想の足跡を残さない限り、歴史の一コマとして消え去る程度の威厳しかありません。

文明の向上に大いに与った知識人たちのリストをつくるとすれば、たとえ短くてもその中にアダム・スミスが含まれるのは必定です。彼は現代世界の発展に寄与した人物としてそびえたっています。『国富論』の中で、当時まだ産声をあげたばかりの市場経済がいかに作用するかについてグローバルな視点から議論を組み立てた点で、スミスは先行者たちよりもはるかに先を見据えていました。彼はその仕事の中で、世界の生活水準をとてつもなく向上させる社会のしくみの変化に声援を送りました。

人々は、有史以来ほぼいつも変化に乏しく先の見えている社会に黙従し、ある意味でそれを信奉していたと思われる。12世紀の若い領地農民は、病、飢え、自然災害、暴力で死なない限りは、領主の土地の同じ一画をずっと耕し続けるのだと期待できました。そして、死はしばしば急にやってきました。生まれたときに余命は平均して25年で、これはそれまで数千年にわたって同じでした。さらに、農民は自分の子供たち、それから当然その子供たちもが、順番に同じ畑を耕し続けると完全に予想できました。おそらく、こうしたプログラムされた生活には一定の安心感がありました。それは、個人

5) 原注 — John Maynard Keynes, *The Theory of Employment, Interest and Money*, 1936, p. 383. (塩野谷祐一訳『ケインズ全集第7巻 雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社, 1983年, 386ページ)。はじめに本稿における些事の便宜的処理法を示す。①原注は全部で8個ある。その他にも原資料が特定できる場合は適宜補った。②外国文献の引用は必ずしも邦訳に従っていない。③訳文中の〔 〕内は大幅な付加を示す。グリーンズパンの英語は英訳が必要と言われるほど難解なことも多く、他の箇所でも小さな付加は行っているが、逐一断つてはいない。

*Adventures in a New World*, Penguin, 2007) は一冊だが、訳書は二分冊で副題が異なる。

4) Alan Greenspan, "Adam Smith," at the Adam Smith Memorial Lecture, Kirkcaldy, Scotland, February 6, 2005. テキストは連邦準備のウェブサイトから入手できる。http://www.federalreserve.gov/boarddocs/speeches/2005/20050206/default.htm

の企てをほとんど受け入れないほど固定的な社会的・法的な縦秩序によって定められていました。

農業技術の改善と、ほぼ自給的な封建的荘園の域外に及ぶ商取引の拡大が分業を促進し、生活水準の向上と人口の増大をもたらしたことは間違いありません。しかし、両者の成長は遅々としたものでした。15世紀にも、何世代も前の先祖たちと同じ生産活動に従事する人たちが山ほどいました。

スミスが生きたのは、なお残る封建的で中世的な活動やそれに続く重商主義を市場の諸力が解体し始めた時代でした。宗教改革の思想と出来事は、王権神授説の解体を促しましたが、その影響により、各個人が教会や国家が課す制約から独立に行為するという見方が18世紀前半に出現します。政治的、経済的自由という現代的な考え方が、初めて人を引きつけました。これは、啓蒙、とりわけイングランド、スコットランド、フランスにおける啓蒙の時代に関連するもので、理性によって導かれる個人が、抑圧的な制限や慣習から解放されて自らの運命を選ぶ自由をもつような社会観を描き出しました。

いま法の支配として知られているもの、すなわち個人の権利と所有権の保護が一般化し、おかげで人々はものをつくり、取引し、技術革新を行う活動を拡大するように背中を押されます。企業活動という新たなシステムのすべてが成長し始めました。そのややこしさや、それがもたらした結果に戸惑いはあったようですが、それでも「見えざる手」に導かれているかのように、ある種の安定性をもつと思えたのです。例えば、フランスの重農学派は、18世紀半ばにこのナゾ (conundrum) を解きほぐそうとして萌芽的な諸原理を発展させようとして取り組みます。こうした諸原理は、計算できる規則性によって統治された経済がいかに機能するかを説明する試みでした。この規則性とはすなわち自然法であり、重農学派のグルネはこれを「なす

に任せよ、成り行きに任せよ」(Laissez-faire, laissez-passer) と特徴づけます<sup>6)</sup>。ただ、重農学派の影響は、そのモデルがひいき目に見ても不完全なことを示す証拠が積み上がって別の経済学者たちの影響が強まると、急速に衰えました。

もっと一般的に、一見すると混沌にしか見えない市場取引を概念的に明らかにする諸原理の体系とは何でしょうか。これを確定する仕事があダム・スミスに委ねられたのです。1776年、スミスは人類の知性史における偉大な達成の一つを生み出しました。『諸国民の富の本質と原因に関する研究』〔『国富論』〕です。スミスの自由市場パラダイムの大半が今なおあてはまるものです。

スミスは、疑いなく重農学派、また友人のデイヴィッド・ヒュームや恩師のフランシス・ハチスン、さらにその他の啓蒙の参加者たちから刺激を受けました。初期の経済学者たちの貢献は目覚ましいもので、それらにはスミスのグローバルな視点を先取りするものが多くありました。しかし、スミスは先行者たちをはるかに超えて先に進み、市場プロセスを彼らよりずっと畏敬の念を起こさせるような知的分析にかけたのです。フランツ・ヨーゼフ・ハイドンの弦楽四重奏曲、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの交響曲についていろいろ言う人はいます。けれども、少なくとも私の耳には、モーツァルトはハイドンやその同時代人たちが到達できたよりも高い地点に到達していたと思える

6) Jean Claude Marie Vincent de Gournay, *Mémoires et lettres de Vincent de Gournay*, éd. par Takumi Tsuda, Tokyo, Kinokuniya, 1993, p. 157. グリーンスパンは「Tournay」としているが、おそらく単純な誤りであろう。ちなみに、一般に用いられている「QWERTY」配列のキーボードではGの上がTである。グルネ(1712-1759)については、米田昇平『欲求と秩序——18世紀フランス経済学の展開』昭和堂、2005年、第4章参照。

のです。スミスも彼の畑においてそうでした。

彼は結論しました。一国の富を増すには、各個人が法に従いつつも「自分なりの利益を自分なりの仕方でも追求し、勤勉と資本をもって……他の……人たちと競争し合う自由をもつ<sup>7)</sup>」べきであると。「私たちがご馳走を期待するのは、肉屋、つくり酒屋、パン屋の慈悲心からではなく、利益に対する彼らなりの関心からである<sup>8)</sup>」。各個人は私的な利得に駆り立てられているが、「見えざる手に導かれて」公共善を促進しており、それは「彼の意図の一部をなさない」のである<sup>9)</sup>。最後の引用に見られる洞察は、人類史の大半において利己心から行為すること——つまり富の蓄積を追求すること——は見苦しいと考えられており、場合によっては法にふれると思われていたことを考えると、それだけなお非凡なものです。

スミスは『国富論』冒頭の数段落において、労働の生産性の伸長が厚生を増すうえで果たす決定的な役割を認めています。「労働が行われるときの熟練、技能、判断力」を一国の生活水準の本質的な決定要因としている箇所がそれです。「ある国の土壌、気候、領土の広さがどう

であれ、ある定まった条件のもとでは年ごとの供給の多寡を左右するのは……労働の生産力である<sup>10)</sup>」。2世紀以上にわたる経済思想は、この洞察に新たなものをほとんどつけ加えていません。

改まった経験的データが正直いってほとんどなかったのに、スミスはどんな商業のしくみや制度が当時の文明世界の大部分に深甚な影響を与えてそれを変える一連の原理をもたすかに関して、大局を見据えた推論をしてみせたのです。こうした諸原理に基づく経済は、まず増大する人口を扶養できるだけの生活の資を、次にずっと遅れてですが、寿命を延ばすような生活の物的条件を生み出します。寿命が延びたことで、各個人は長期的な個人目標を立てることができるようになりますが、この可能性というのは、それ以前の世代の中では、ほんの一握りの人たちを除き縁遠いものでした。

\*\*\*

スミスの思想は肥沃な地に落ち、数十年ほどで習慣的な知恵の域にまで近づきました。地主ジェントリが古い秩序の主な受益者でしたが、彼らの古来の政治権力は、四半世紀前に始まっていた産業革命が生み出した商人や製造業者という新しい階級に道を譲りつつありました。イギリスや他の国で、重商主義的な規制を廃せよという圧力が形成されつつありました。けれども、台頭しつつあったエリートたちは、スミスのおかげで自分たちの声を手にし、認められるようになりました。

しかし、このスミスの承認は、市場と取引の自由に向けられたものであり、新しい商業エリートに向けられたものではありませんでした。スミスは彼らの商業活動の多くを手厳しく非難しています。自分の合理的な利益を追求す

7) 原注——Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, p. 687. (IV.9.51. 大河内一男監訳『国富論』中公文庫, 1978年, 第2巻, 511ページ)。なお「IV.9.51」とは第4篇第9章第51段落を指す。

8) 原注——*Ibid.*, pp. 26–27. (I.2.2. 同上書第1巻, 26ページ)。交換性向について述べたこの一節の真意を示そう。肉屋は肉を食べたい人に肉を恵んでくれはしない。彼にとってはそれを売るのが生活である。パン屋も、パンが欲しい人のためというよりは自分のためにパンを焼いて売るのが生活で、そうやって得たおカネで肉を買う。こうして、誰もが自分のことしか考えておらず利己心から行為しているだけなのに、他人を思いやっているのと同じ結果になるという意味である。

9) 原注——*Ibid.*, p. 456. (IV.2.9. 同上書第2巻, 120ページ)。

10) 原注——*Ibid.*, p. 10. (Introduction. 3, 5. 同上書第1巻, 2–3ページ)。

る個人が解き放った競争の諸力によって各人がよりよき生活を求めているというのがスミスの結論でした。こうした競争という相互作用は専門分化と分業をおし進めるので、経済成長をもたらすのです。

\*\*\*

競争の作用についてスミスは基本的に好意的な見方を示しましたが、19世紀前半に工場組織が明らかに行き過ぎるようになると、市場に対する規制を求める圧力にぶつかります。この行き過ぎを1世紀のちに詩人のウィリアム・ブレイクは「……邪悪な悪魔のひき臼」(the dark Satanic mills)として難じますが、それは工業が盛んな当時のイングランドの特徴をよく言い表すものです。

『国富論』など書かれていなくても、おそらく産業革命は19世紀にも止むことなしに目を見張るようなペースで進んだでしょう。ですが、いま自由市場資本主義と呼ばれているものが本来的に安定的で成長をもたらすとスミスが論じていなかったら、国民全体が物的に恵まれた生活を送れるという素晴らしい前進に手が届いていなかったとしても不思議ではありません。競争が生み出すストレスや工業化の明らかな病弊に対して重商主義的な規制を強めるように求める圧力が出てきたと思われます。

\*\*\*

スミスは、現在古典派として他と区別される一群の経済学者たちの先頭を切りました。彼に続いた人のうち目立った顔ぶれとしては、株の仲買人や議員をつとめて優れた時論家<sup>エッセイスト</sup>でもあったデイヴィッド・リカードがいます。彼の主著は1817年に出た『経済学および課税の原理』ですが、全面的に自由な商取引システムの構造を厳密に、しかし楽観的な色合いはあまり出さずに分析したものです。

台頭しつつあった産業家階級の政治的な猛威

は古典派の知的な支持を得ており、そのもとで重商主義は徐々に廃されていったので、経済的自由は広い範囲に行き渡ります。この変化の過程が頂点に達したのは、イギリスにおける1846年の穀物法の廃止です。このころには、古典派経済学を受容範囲は、文明世界の大部分での商業生活の再編を促すほど広いものでした。

\*\*\*

アダム・スミスは1790年に他界しますが、彼が甚大な影響をもち始めるのはずっとあとになってからでした。しかし、リカードは1823年まで生き、古典派のもう一人の代表者ジョン・スチュアート・ミルは1873年まで生きていました。彼らをはじめ、早い段階でスミスに続いた人たちがいまの経済状況を見たら、見慣れた範囲内のものだと思うのでしょうか。

ある意味で、それはありそうにないことです。先進国ではいまや飢えは事実上存在しません。トマス・ロバート・マルサスは18世紀末に生存の限界について分析し、これは影響力をもったので古典派の多くが支持しましたが、彼の考えは誤っていたことが証明されたのです。

マルサスは、それまで長いことあった停滞をもたらす諸力は弱まらないだろうと考えて悲観的な見方を打ち出しました。人口は幾何学的〔等比数列的〕に伸びる傾向をもつので、〔等差数列的にしか伸びない〕生存手段の成長の限界によって頭打ちになるだろうという見方です。穀物収穫量に数千年もの間わずかしき変化がないことをみてとったマルサスは、農業における収穫量が劇的に伸びるという予測はできなくなりました。例えば、アメリカでは穀物（正確にはトウモロコシというべきですが）の収穫量は1800年代前半から2004年までに1エーカー当たり25ブッシェルから160ブッシェルに伸びています。

次に、19世紀前半に生きていた人たちは、先進国で200年のちに寿命が平均して自分たち

の2倍以上に伸びるだろうとは想像できなかつたと思われます。一人当たり実質GDPは1820年からほぼ20倍に伸びましたが、寿命の伸びは概してその直接的間接的な結果です。このデータは経済史家のアンガス・マディソンの推計に基づいています<sup>11)</sup>。こうして産出が伸びたから、社会は栄養、公衆衛生、医療に注げる資源を増やせたわけです。

それでも、現代の途上地域の多くは、残念ながら私たちの先祖たちに近い状況にあると思われます。疫病はエイズという形で今なお残り、その結果アフリカの大半における寿命は2世紀前の世界の大部分における寿命とあまり変わりません。世界の小さくはない部分が、今なお断続的に飢饉を経験しています。

先進国や数多くの新興国の労働者は生活水準が目覚ましい上昇を目にしていますが、昔の労働者がもっていた不安の影のようなものは消えていません。今日的大幅な技術進歩やそれに伴う労働移動は、19世紀前半のラッドライトたちの暴力を解き放つほどではありませんが、それでも仕事の大きい不安定性の要因となっています。

最後に、古典派経済学者は当時見られた重商主義の保守性と闘ったわけですから、現代の論壇の一部に広まっている反資本主義的、反自由取引的なレトリックの中で自らのパラダイムが攻撃されていると思うでしょう。

\*\*\*

さて、いまの経済に欠点があるとしても、産業革命と自由市場資本主義の出現とが、2世紀前には想像すらできなかった物的水準にまで文明を連れてきてくれたことは、ほとんど疑いよ

うありません。事実上何千年も停滞していたあと生活水準と人口が劇的に上向いた18世紀後半とは、歴史の一大転換点の一つでした。

この前進は、ほぼ例外なく現代にまで引き継がれています。1820年から一人当たり実質GDPの世界平均は年に1.2%伸びていますが、これは58年ごとに生活水準を2倍にするペースです。これと同じ期間に、世界の人口は6倍になりました。ここ2000年で、人口はそれなりに目立つ程度に増えただけですので、一人当たり所得は最低限生存を維持できる水準を多少上回ってはいるわけです。

\*\*\*

アダム・スミスの先見性は、『国富論』出版後も生きていましたが、今日でも生きています。しかし、介入を是とする時代の中で、スミスの寄与に対する尊重は自由市場資本主義の受容の度合次第で盛衰を見ました。

この新たな経済秩序は、最初は18世紀後半に受け入れられますが、直後に批判に出会います。産業革命は「邪悪な悪魔のひき臼」をもたららし、これによっていろいろな惨めさがもたらされました。実をいいますと、産業革命初期のころには人口の少なくない部分が生存するのがやっとでしたので、その生活は悲惨なものでした。しかし、それはそれで生活ではありました。それより半世紀前なら、こうした惨めな魂たちの多くが、幼少時に亡くなっていたでしょう。それでもなお、新しい秩序の出現後数十年で、目に見える惨めさ、最低水準のための惨めな闘いに触発されて、経済のしくみに関して百家争鳴の見解が現れました。

ロバート・オーウェンはイギリスで成功した工場主ですが、スミスに反論して制約なき自由放任は本質的に貧困と病をもたらすと訴えました。彼は「ユートピア的社會主義」と呼ばれる学派をつくりました。オーウェン自身によると「相互協力の村」でした。1826年に彼はアメリ

11) Angus Maddison, *Monitoring the World Economy 1820-1992*, Development Centre of the OECD, 1995. (政治経済研究所訳『世界経済の成長史 1820~1992年——199ヶ国を対象とする分析と推計』東洋経済新報社、2000年)。

カでこういう共同体を立ち上げ、それを「ニューハーモニー」と名づけました。皮肉なことに、共同体内でもめごとによって2年もたたずにニューハーモニーの実験は解体します。多くの人が、彼の提案は自然法の一部をなす人間本性の法則に反すると思いました。

でもオーウェンがカリスマ的に大きな理想に身を捧げたので、ぞっとするような労働環境で最低限度の暮らしを維持するのがやっとの人たちの中から、彼に従う人たちが次々に現れました。労働状況がもっと文明的なものに改善されるには、まだ1世紀かかります。

カール・マルクスはオーウェンや彼を支持するユートピア主義者を侮蔑しました。実は、マルクスはスミスやリカードのような知的な厳密さに魅かれていました。マルクスにとって彼らは、資本主義の進化をある程度まで正しく描き出していたのです。ご承知のとおり、マルクスにとって資本主義とは共産主義が必然的に出現するまでの移行期でした。

マルクスとは異なる考え方をしたのはフェビアン派社会主義者たちです。彼らは19世紀末に産声をあげ、より集団的な経済に至る、革命(revolution)というよりは進化(evolution)という考え方を支持しました。実際にフェビアン協会ほかの改革派によって自由放任に多くの制約が求められるようになり、それがついに法制化されました。

けれども、19世紀をつうじて市場資本主義に対する批判が一般化したにもかかわらず、生活水準は向上し続け、世界の人口は1900年には10~15億人を超えるほどに急増しました。19世紀前半に寿命が大幅に伸びたのは、主にきれいな水を確実に得られるようにする努力のおかげですし、それは物資が豊かになったことで可能になった資本ストックの増大のおかげです。

\*\*\*

19世紀の資本主義批判が強調したのは、企業活動における逸脱でした。資本家が労働者を搾取しているというマルクスの見方はさておき、多くの人が独占を制約なき資本主義の自然な帰結であると見ました。スミスはもっと早い時期に、よく引用されますが、「同業者は余興や気晴らしのために交わることさえあまりないが、会話をすると決まって人々に対するはかりごとをしたり値上げの相談をしたりする<sup>12)</sup>」と得意げに語っています。

とはいえ、平均的な労働者の生活水準が向上したことは間違いなく、19世紀のほとんどと20世紀の前半には、これが社会主義の広範囲にわたる蔓延に対して効果のある政治的防壁として機能しました。このころには農業が各国経済を大いに支配していたので、工業がときに景気後退をもたらしても資本主義的な秩序を変えるほどの深刻な政治的反応を呼び覚ますことはありませんでした。

19世紀前半にスミスのあとに続いたジャン・バティスト・セーの著作は、この点で重要なものです。彼は、供給がそれ自身の需要をつくりだすことを前提し、経済活動における大幅な収縮は時がたてば解決すると結論しました<sup>13)</sup>。セー法則は広範に受け入れられ、市場に基づく価格機構が自己安定的性質をもつという信頼を導き、これらは経済後退の時代に政府介入を抑止する主な要因となりました。とりわけ、19世紀後半と20世紀の前半においてそうでした。

しかし、1930年代の大恐慌のおかげで、古典派経済学者、特にセー法則の楽観的な結論に対する攻撃がかなり高まりました。1930年代に経済停滞が尾を引くと、資本主義が自動調整力をもつという肝心要の(critical)見解は不評を買うようになります。

12) 原注——*Ibid.*, p. 10. (I. Part2. 27. 前掲書第1巻, 214ページ)。

13) 原注——Jean Baptiste Say, *Traité d'économie politique*, 1803.

政府の市場介入が目に見えて増え、実質的に重商主義に逆戻りした部分がありましたが、これはおそらく大恐慌という逆境に対する不可避的な反応でしょう。同時に、マルクスの考え方が西側で力を得ました。これはおそらく、公然とマルクスの考えを実行した主勢力としてのソ連における抑圧が、第2次世界大戦まではあまり知られていなかったためでしょう。

しかし、第2次世界大戦直後の時期には政府管理による経済の顔面に亀裂が走り、それは時とともにますます大きくなっていきます。戦時中の状況を受け継いで統制過多になっていたイギリス経済には、終戦直後に次から次に執拗な苦痛がおそうようになっていました。アメリカでは、1960年代に均整をもたらさないマクロ経済政策がインフレ率を徐々に引き上げ始めていました。1970年代にはインフレ抑止のために賃金・物価統制が実施されますが、無効かつ無力だとわかりました。集権計画で運営されたソ連経済が西側に追いつきつつあるという見方は、1980年代前半にはますます疑わしく思われるようになります。この見方にも支持者はいましたが、1989年のベルリンの壁の崩壊によって鉄のカーテンの背後で起こっていた経済の廃墟化が白日の下に晒されると、完全に信用が失墜します。

第2次世界大戦後の東西分裂は、期せずして経済システムの40年にわたる比較実験を実施させました。これは、いわばスミス対マルクスです。鉄のカーテンの撤廃を見ればわかりますが、結果は明らかに市場経済の勝利でした。このことの帰結は広い範囲に影響を及ぼします。自由市場を核に運営される経済の長所と集権計画で運営される経済の長所をめぐる長い論争は、終わりを迎えました。集権計画経済を賛美する声は聞かれません。そればかりか、これにふれる人すらいません。アダム・スミスとその後継者たちの諸原理が、ただ部分的な修正を施しただけで、経済運営に関しておそらく唯一の

現存する有効なパラダイムとして目の前にあります。途上国の大半が、市場中心の経済の方に静かにシフトしました。

ただ、終戦直後の時期にさえ、先進国において規制がもたらした歪みはますます苛立たしく感じられるようになっていました。1970年代を皮切りに、アメリカの大統領たちは、議会超党派からなる多数派の支持を受けて、輸送、通信、エネルギー、金融サービス業といった大きな部門で規制緩和を進めました。イギリスほか各国でも同様の措置がとられました。当時表明されていた目的は、競争を刺激することでしたが、アダム・スミスの影響で競争はますます生産性や生活水準向上のために重要な刺激剤とみなされるようになっていきます。遅々としてはいても着実に国際貿易と金融における障壁が削減されたおかげで、経済の硬直性がなくなっていきました。

アメリカでこうした戦略が成功したため、1980年代には、営利活動に対する規制の手綱を緩めれば自国経済の柔軟性が増すという旧来の見方が正しかったと認められるようになりました。柔軟性と言いましたが、これには、ショックに対する反応が素早くなること、それに伴ってショックがもたらす景気後退の諸帰結を吸収する力が増すこと、ショックの影響からの回復が早まることが含まれます。柔軟性を向上させると得なことがあります。それは、市場経済が政策策定者の先導に従わされるのではなく、自動的に調整を行えるようになるという点です。前者は、遅すぎる人が多いし、誤ることも多いのです。こうした見方には、ある意味でジャン・バティスト・セーの反響が認められますが、アダム・スミスの寄与に対する評価が21世紀になって復活したことによって頂点に達しました。

\*\*\*

古典派経済学、とりわけリカードやアルフ

レッド・マーシャルが練り直して定式化したそれは、経済における各参加者が合理的な利己心に導かれて市場で行う競争を重視しました<sup>14)</sup>。これらの参加者の価値選好は市場での行為を見ればわかるでしょう。けれども、価値選好の最終的な源泉は、経済学の対象範囲外にあると仮定されていました。

アダム・スミスの認識範囲の方が広いのです。彼は、『国富論』のほぼ20年前に刊行した『道徳感情論』で、人間の動機や相互交流の根源に分け入ろうとしました。彼が導き出した結論は、人と人との世俗的な相互交流や生活を支援する諸制度を促す人間の共感が、社会的つながりをつくるのに大いに貢献するというものでした。

人々はまた、自らの生活を導くうえで、生得的と思われる正邪の分別を発揮します。これはおそらく自然法が正邪を吟味してより分けることを意味します。こうした精神作用が、各人の価値選好を定めてその強さを維持させます。合理的思考の出番はというと、どうやら熟考するときや内面の傾向を外に現す行為を始めるときのみらしい、とスミスの同上書は述べるのです。

ここ2世紀を振り返ると、学者たちはこの問題を集中的に取り上げましたが、生得的な価値選好の源泉に関する私たちの知識は、啓蒙思想に関係した議論によって仰々しく具体化されたときのままです。今日の経済的な意思決定の大半が、多かれ少なかれ合理的な利己心から行為する各個人という昔ながらの前提に合致します。そうでなかったとしたら、経済の各変数は市場でふだん観察される以上に変動していたことでしょう。実際、合理的な利己心という前提がなければ、古典派経済学のいう供給曲線と需要曲線は交わることもなく、市場で価格が決定される可能性がなくなってしまうでしょう。例えば、今日の驚くべき量の国際的な取引が、ス

ミスの見えざる手の国際版のようなものによって導かれていなければ、私たちが日々経験している経済の相対的な安定が実現しているとはほとんど想像できません。

こう考えたからといって、人々が商取引においていつも合理的に行為しているということにはなりません。実物市場や金融市場において周期的にバブルが発生する以上、そうではないことが明らかです。とはいえ、スミスが展開し、のちに他の学者たちがさらに詳論した経済の道筋の説明は、大ざっぱに言って今日の世界の商取引や諸国民の富の決定因を十分説明すると思われるのです。

\*\*\*

専門分野としての経済学の特筆すべき一面は、それが主としてイギリスという土地で姿を現したという点です。スミス、リカード、ミル、マーシャル、ケインズが、古典派経済学を発展させて膨らませました。マルクスでさえ、革命を謳う論文の多くをロンドンで書き上げました。啓蒙、とりわけスミスやヒュームが活躍したカーコーディを含む地域で繰り広げられたスコットランド啓蒙における少数の知識人たちの素晴らしい洞察は、人々がめいめいの利己心に従って自由に選択して行為するという現代的な見方を生み出しました。その結果私たちは、スミスの世代の人たちがおほろげにすら想像できなかった物的恩恵と長寿を享受しています。私たちは、彼ら、中でもアダム・スミスに対して借りがあります。これは感謝すべき借りですが、決して返しきることのできない借りなのです。

## II グリーンスパンのスミス論の特徴と思想的背景

以上が、グリーンスパンのスミス論である。その特徴を見ていこう。

現代の大学の経済学部で行われている研究を

14) 原注 — Alfred Marshall, *Principles of Economics*, 1890.

眺めると、2種類の研究ジャンルが大変発達しているのが見られる。すなわち、一方では18世紀に至る全ヨーロッパ的な啓蒙思想の展開に関する研究が盛況であるとともに、他方で現代経済学の世界では高度に数理的な研究が蓄積されている。ところが、これらの間に相互連絡性のようなものはほとんど見られない。前者においては、狭義の経済分析がいかにして伝統的な知の枠組から析出されてきたかという関心が根強いいためか、古典学、哲学、社会思想、政治学、法学、軍事史、宗教史、大学史、科学史、文学史など、経済分析という木が生え育った土壌や、同じ土壌に隣接して生えてきた木が細密に分析されている。体系としての思想 (thought) というよりも、細かく区分された着想 (idea) のユニットの展開と変遷を追跡することにより、見慣れたものと思われていた光景が新たな光のもとで異化されて新鮮な再発見がもたらされることも多い。この結果、研究のこのジャンルは、いわば「思想工学」ともいべき特質を帯びるに至っているように思われる。これに対して、後者においては、しばしば数理的な手法で経済現象が分析され、純粋な理論経済学における仮構的推論手続を伴うモデルが現実経済の説明責任を必ずしも負わないことに対する疑念から「実証的」と称するサブジャンル (計量経済学) も生まれているが、それでさえやはり数理的な手法を重用しているには違いない。この結果、研究のこのジャンルは、いわば「経済工学」ともいべき特質を帯びるようになっていられる。

ところで、グリーンSPANは一国中央銀行の総裁であったわけだから、ふだんの仕事はマクロ経済の分析であり、その意味では経済工学に従事してきた人間である。このタイプの人物が古典的な経済学の著作について語るとき、経済工学における饒舌とは裏腹に突然たどたどしくなることが通例である。しかし、一読してわかるとおり、スミスの世界に分け入るに際して、

グリーンSPANはふだんプレスや議会に対してマクロ経済の展望を語るるときと同じか、見ようによってはそのとき以上に流暢に語っており、その言葉は聴き手ないしは読み手に迫ってくる力をもつといえないだろうか。むろん、彼は研究者ではないから、長年にわたるテキスト読解の蓄積から思想工学を存分に展開してスミス理解に新境地を拓いたとはいえないかもしれない。にもかかわらず、おそらく他の人物からは期待できそうもないアングルから独自のスミス像を描き出しているように思うのである。本稿の残りの部分では、筆者がそう考える理由を、いくつかの側面から考えていきたい。

### 1. 生産性論に引きつけたスミス理解

本講演は、ケインズ『一般理論』末の有名なセリフを引き合いに出して思想の影響力の強さに注意を喚起したうえで、伝統的な社会では制限されていた個人の自由を思想が解き放つことでいかに市場経済が生活水準を向上させたかという論点に移っていく。そのねらいは、このことをスミスが正しく見抜いたうえで、こうした結果をもたらすパワーの源となる思想を定式化したと強調することにある。グリーンSPANの最初の職業はジャズバンドのクラリネット奏者であったが、ジュリアード音楽院出身である彼はクラシックにも造詣が深い。そんな彼が音楽史を引き合いに出して、スミスの先行者をハイドンに、そしてスミスをもーツァルトに喩えている箇所は注意を引く。しかし、この喩えの真意は、その直後に引かれる『国富論』のパッセージが決まって分業と生産性に関する箇所であることを考慮して初めて見えてくるだろう。

グリーンSPANがFRB議長に就任したのは1987年である。最初は金融の分野で専門家としてのキャリアがないことなどから実力が低く見積もられており、1990年代の前半にもリセッションがあったためにそういう状況が続いたのに、1990年代半ばになると安定したマクロ経

済の運営実績に世界から注目が集まり始める。そして、このとき問題になったのが「生産性」であった。当時はグラフィカルなユーザーインターフェイス（キーボードでの文字入力よりマウスでのクリックで操作できる使用環境）をもつウィンドウズ95が発売されるとともにインターネットが家庭にも普及し始めたが、これによりIT部門が売り上げを伸ばしただけでなく、ITがほとんどあらゆるビジネスを変えつつあった。それが生産性の上昇と在庫の最小化をもたらし、景気循環の波が消滅したなどといわれた。グリーンスパンもそのことをよく承知していたが、彼の見方には独自のものがあり、アジアやアフリカの一部さえもが先進国に近づくレースのスタートを切ったことによって、地球上の広いエリアに貧困が蔓延するという惨状が人類史上初めて克服されるという感覚をもっていた。だから、彼がスミスの分業論に注目するのは、単に気の利いた連想を余興として手短かに披露してみせるためではない。

さて、いまの経済に欠点があるとしても、産業革命と自由市場資本主義の出現とが、2世紀前には想像すらできなかった物的水準にまで文明を連れてきてくれたことは、ほとんど疑いようありません。事実上何千年も停滞していたあと生活水準と人口が劇的に上向いた18世紀後半とは、歴史の一大転換点の一つでした。

このような時代に生きて正確に自分の時代のマクロ史的意義を言葉にした人物として、スミスをとらえているのである。そこが、モーツァルトのハイドンより優れた点である。同時にまた、自らが世界の耳目を集めた1990年代以降の同時代をも、そうした長い時間軸の中においてみようという意図が読み取れる。

この視点は、実は彼の『波乱の時代』でも再述されている。しかもそれは、通りすがりの一

論点としてではなく、どうやら著作全体の土台をなす基本視角に据えられているらしいのである。さらにいくつかの特徴を確認して裏づけをとったうえで、最後にもう一度この話に立ち返りたい。

## 2. 経済史と関係づけた経済学史——自由市場の道徳性の擁護

ここまで便宜的にこの講演を「スミス論」と述べてきたが、一読してわかるとおり、グリーンスパンは経済史と経済学史を関連づけながら、現代世界を自分なりのパースペクティブで解釈しようとしているともいえる。その意味で、これはスミスを題材にした現代経済論でもある。しかし、現代経済をめぐるただ単にとりこめもないことを並べるものではなく、経済史の進展のプロセスを、経済思想が及ぼした影響と一体としてとらえながらたどるという意図をもったものである。

グリーンスパンが語る、啓蒙期から21世紀に至る経済思想の大まかな展開を整理してみよう。第1に、長い封建時代の停滞的均衡をやぶって商工業が発達した啓蒙期には、まず重商主義が力をもった。第2に、フランスの重農（自然）学派が自由放任論を唱え、これがスミスをはじめとするスコットランドの知識人に流れ込み、少し間をおいて19世紀には支配的な教説になる。これに対しては、主に2種類の反論があった。まず、マルサスの懸念がそれであったが、スミスが認めた生産性の増大が産業革命のもたらした個々の難問をも克服させ、自由主義の発展とともに世界は総じて豊かさを楽しむようになる。次に、社会主義諸勢力の拡大があり、急進的なものから漸進的なものまで各種の流派を生んだが、経済史研究が明らかにしているとおり、やはり生産性の伸長で世界は全体として豊かになった。第3に、大恐慌によりいわゆる「セー法則」がほころびて自由主義が後退し、ケインズ経済学が力を得る。しかし、早くも第

2次世界大戦後にはその限界が現れ始め、一時はソ連の計画経済への期待が高まった。ところが第4に、その後こうした介入路線にもかかわらず主要国経済は低迷を余儀なくされたために、1980～90年代以降は再び自由主義が蘇生する。こうして、啓蒙期から現代まで、おおむね次のような経済思想の有為転変があった。

- 1) 重商主義期 近代初頭～19世紀初頭
- 2) 自由主義期 19世紀初頭～1920年代
- 3) 現代重商主義期 1930年代～1970年代
- 4) 現代自由主義期 1980年代～現在

以上のような経済思想史理解は、基本的には通説とあまり変わらない。このため、グリーンズパンが20世紀後半からのいわゆる「新自由主義」の台頭を手放しで賛美しているとして、これに反論したい読者もいることだろう。むしろ、そうとるのも自由ではある。ところが、彼の経済学史理解は、よく読むと通説とは少し、ないしかなり異なる見解を含んでいる。筆者が注目したいのは、この点である。

第1に、新自由主義の発展を述べるにあたり、通常ならフリードマンの名を挙げるところであろうが、誰も代表的な学者の名を挙げていない。もっとも、『波乱の時代』を見てみると、そこでは彼の名が挙がっている。ただし、ある人物のあとに。

初めてアダム・スミスの本を読んだのは第2次世界大戦のあとだったが、当時スミス理論の評価は低かった。冷戦期には、鉄のカーテンの両側を見ると、一方では経済には厳しい規制がかけられ、他方では中央計画で運営される時期が長かった。「レッセフェール」は事実上非難の言葉であった。自由市場資本主義を擁護する人物でいちばん目立ったのは、アイン・ランド、ミルトン・フリードマンといった人たちで、彼ら

は偶像破壊者であった<sup>15)</sup>。

グリーンズパンが、フリードマンをロシア生まれの亡命作家ランド (Ayn Rand 1905–1982) のあとに置いていることには注意を要する。彼は若いころランドと直接交流し、その深い影響を受けた。アメリカでは、ランドは自由主義を代表する理論家であり、その主著『肩をすくめるアトラス』は「聖書の次にアメリカ人に影響を与えた本」とまで言われ、ずいぶん前から高校生にも名を知られているほどの国民的思想家だが、わが国では経済学部の大学教授すら知らないという、説明に窮するような現実が目前にある<sup>16)</sup>。グリーンズパンは、自らがランド派の自由主義運動に関わったことを誇りに思っており、上記時代区分の第4期における自由主義復興の世界的な胎動を、同時代の傍観者としてではなく、むしろ当事者として叙述しているのである。

自由主義に関する彼のこうした独自の立ち位置は、通説との第2の齟齬と関わっている。それは、ケインズに対する明白な軽視である。講

15) 『波乱の時代』下巻、24ページ。

16) 日本人の西洋政治思想の摂取は全体として不用意に左傾しすぎており、しかもそのことに経済学者も気づいていない。このことが与える影響は実に広範囲に及び、サンデルが大衆的にもはやされる最近の情勢にすら影を落としていよう。特に問題と思われるのは、英米という昔といまの世界の最先進国において政治的「保守」が経済学的には自由主義をとるという事実と、それを必然的にする思想的土壌に対する国を挙げた無関心であろう。この点は、それが国際感覚の欠如と一体不可分になっている限りで、今後の世代の研究者が克服しなければならない重要な課題の一つである。なお、ランドとグリーンズパンの交流については次を見よ。村井明彦「グリーンズパン「金と経済的自由」の翻訳と解説」『同志社商学』第63巻第4号、2012年1月；同「グリーンズパンのアイン・ランド・コネクション1——我あり、ゆえに我思う」『同志社商学』第64巻第1・2合併号、2012年7月。

演を『一般理論』の引用から始めていることは、グリーンスパンがケインズを尊敬していることを少しも意味しない。むしろ彼はケインズをはっきりと見下している。そのことは、本文を読めば明白である。まず、セー法則の破綻を一過性の問題として扱い、20世紀後半における自由主義の復興をスミスとともにセーの名を挙げて叙述している。さらに印象的なのは、最後のほうでケインズをマーシャルとともに古典派を発展させた人物に含めている点である。

彼がこうしたケインズ理解を示すには理由がある。ランドのサークルではオーストリア学派、とりわけミーゼスの各著作が標準的な教科書となっていた。そして、ミーゼスの考えによると、ケインズこそセー法則を誤解しているのである。すなわち、セーは企業家が投資に際して目算を誤らない限り供給分が売れると述べたのであって、そうでない場合にも供給分の販路が保証されるなどとは考えていない<sup>17)</sup>。グリーンス

パンはこうした認識を背景に、20世紀にセーが復活したといった、一見わけのわからない見解を堂々と表明しているのである<sup>18)</sup>。

さて、本資料においてケインズ以上に批判されている人物がいる。読者はそれが誰かおわかりだろうか。むろん、まずはオーウェン、マルクスなどの社会主義者であるが、それで終わりではない。一度も名前を出さずに批判されているある著名人がいると思われるのである。それはポラニーである。名前が見えないので一見わかりにくいのが、経済学史を多少とも手広く学んだ者にとって「悪魔のひき臼」という表現はポラニーの名を大書した広告塔であり、ほとんどその換喩であろう。彼は30年かけて仕上げたという『大転換』において、ブレイクが詩で用いたこの一節をキーワードの一つとして市場資本主義を徹底的な批判に晒した<sup>19)</sup>。グリーンスパンはこれに再反論を加えていると読める。この点が、彼が通説の世界を支配するのとは別の空気を吸っているために行き当たる第3の分かれ道である。

彼はまず、産業革命がもたらした工業労働者

こすとして恐慌の原因分析を展開してきた。

- 18) グリーンスパンのこうした議論のうち、セーの復活という論点は1990年代における需給均衡の継続をもたらしたという自負などが根拠と思われるが、ケインズを古典派に含めたことの真意は詳論されていない。ただ、この結論は次のハイエクのものとはほぼ同じものである。「……「ケインズ革命」は、適切な科学的方法についての誤った観念が、それ以前にわれわれが獲得していた、そして、苦勞して再び獲得しなければならぬであろう多くの重要な洞察の一時的抹殺へと導いた、ひとつの挿入劇にすぎなくなるであろう。私はあえて、このように予言する。」(E. A. ハイエク「回想のケインズと「ケインズ革命」『市場・知識・自由——自由主義の経済思想』田中真晴・田中秀夫編訳、ミネルヴァ書房、1986年、第7章、197-198ページ)。
- 19) カール・ポラニー『大転換——市場社会の形成と崩壊』吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美訳、東洋経済新報社、1975年。

17) Ludwig von Mises, "Lord Keynes and Say's Law," 1950, in *Planning for Freedom: A Collection of Essays and Addresses*, ed. by Bettina B. Greaves, Liberty Fund, 2008, Chapter 10; 喜多見洋「温経知世 vol. 28 ジャン＝バティスト・セー——セー法則の本当の意味は通説と異なる」『エコノミスト』第90巻第17号、2012年4月17日。喜多見によると、セーはスミスの仕事をさらに発展させた人物で、局所的な供給過剰の可能性は認めたが、この不均衡は市場機構を通じた調整で再び均衡に戻り、一般的な供給過剰としての恐慌は原理のうえではありえないと考えた。つまり、ケインズによる「供給はそれ自身の需要をつくり出す」という古典派の総需要・総供給学説の要約(『一般理論』26-27ページ)は、手前勝手なパラフレーズにすぎない。むろん、古典派の見方に反して1930年代には一般的過剰生産の帰結として過少消費があったわけだが、ケインズ自身は大恐慌の原因分析には着手せず、帰結だけを見て対策を講じようとしたというべきである。しかし、原因分析なき対策が奏功すると考えるのは不自然である。他方、オーストリア学派のほうは、信用膨張が一般的過剰生産を引き起

の生活が実際に相当悲惨であったことを認めている。

この新たな経済秩序は、最初は18世紀後半に受け入れられますが、直後に批判に出会います。産業革命は「邪悪な悪魔のひき臼」をもたらし、これによっていろいろな惨めさがもたらされました。実をいいますと、産業革命初期のころには人口の少ない部分が生存するのがやっとでしたので、その生活は悲惨なものでした。

この過程は、マルクスやボラニーら、資本主義に反感を抱く学者によってかなり誇張されてきた。けれども、彼らの仕事は重要な点で誤解に陥っており、実証的な研究が示すのとはかなり異なる社会像を描き出そうと扇情的な表現をつらねているが、こうした著作は、反資本主義のキャンペーンないしはアジテーションの域を出ないのではなかろうか。グリーンズパンがデータにこだわるのは、こうした疑いを抱くからである。

しかし、それはそれで生活ではありました。それより半世紀前なら、こうした惨めな魂たちの多くが、幼少時に亡くなっていたでしょう。それでもなお、新しい秩序の出現後数十年で、目に見える惨めさ、最低水準のための惨めな闘いに触発されて、経済のしくみに関して百家争鳴の見解が現れました。

そのとおりである。学者も含む当時の人々は、大局的な視点からよりもしばしば近視眼的な姿勢から資本主義を攻撃した。近代黎明期のイギリスには貧民が多かった。しかし、その後貧民が増えたことはどう理解すべきであろうか。実は、これは貧民が食べるようになって人口が増えたためであって、食いぶちに与っていた人々

が貧民に堕ちたせいではない。言い換えれば、工場労働がもたらす賃金に最低限度であれ扶養力があつた。マルクスにせよボラニーにせよ、19世紀に猖獗した都会の労働者の困窮を大いに強調しており、彼らの記述を読むとそうした状況が何らかの剥奪や強制によって生じたかのようであるが、実際には農村にいるより希望が持てるからこそ人々は町に出て工場で働いたのである。

グリーンズパンが若いころランドと交流していたことにはすでにふれたが、この機縁から彼女の社会科学論集『資本主義——いまだ知られざる理想』に3編の論文を寄稿している。その一つ「誠意に対する攻撃」では、消費者保護が法制化されたがむしろ企業家の貪欲こそが消費者を守ると述べている<sup>20)</sup>。すなわち、製品が信用を獲得すること、言い換えれば「のれん」を確立して維持することが求める途方もない努力が、結局は消費者をも利するというのである。また、同じくランドのもとに出入りし、新オーストリア学派の代表者となるロスバードらとも親交のあつたヘッセンは、産業革命が婦女子を労働市場の過酷さに晒したというのは俗説であり、むしろ彼らの機会を拡大して恩恵を与えたことを、同書の別の章で論証している<sup>21)</sup>。グリーンズパンが、「しかし、それはそれで生活ではありました。それより半世紀前なら、こうした惨めな魂たちの多くが、幼少時に亡くなっていたでしょう」と述べるのは、ほとんどヘッセンの論文の趣旨そのままである<sup>22)</sup>。

20) Alan Greenspan, "The Assault on Integrity," in Ayn Rand, *et al.*, *Capitalism: Unknown Ideal*, Signet 1986 [1967], Chapter 9.

21) Robert Hessen, "The Effect of the Industrial Revolution on Women and Children," in Ayn Rand, *et al.*, *ibid.*, Chapter 8.

22) ヘッセンが依拠しているのはミーゼスやアシュトンである(ミーゼス『ヒューマン・アクション——人間行為の経済学』村田稔雄訳, 春秋社, 新版,

グリーンスパンがポラニーを念頭においていると考える理由をもう一つ示そう。それは、彼による『国富論』の引用箇所が『大転換』におけるポラニーのそれと重複し、しかも同じ箇所から引き出す結論がまるで正反対だという点である。

ポラニーは『大転換』第10章「社会の発見と経済学」で、肉屋の利己心でパン屋が肉を食べられること、自然条件より生産性が総供給を決めることの2点をスミスから引用し、スミスが自然の力を軽視して、人間の生活条件の決定因を市場経済活動に限定しようとしたことを「人間主義」という語でとらえている。ポラニーの意図は、市場の自己調整力に信頼して人間主義に社会を委ねたとしても、この調整力が崩れたときに人間は自然の過酷さにも似た社会の過酷さに晒され、動物同然になるといったところであろう。

ところが、同じ箇所を参照しながらグリーンスパンはこの人間主義を賞賛し、「2世紀以上にわたる経済思想は、この洞察に新たなものをほとんどつけ加えていません」と述べるのであ

る。人間が動物的になるほど生存を脅かされたとしても、動物にすらなれなかった貧民に、少ないながらも生活の資を与え、それが足りないことがわかると増やしてやったのはやはり企業家であった<sup>23)</sup>。それならば、スミスの自由主義思想は、誤解に基づくものも含めたあまたの非難にもかかわらず、要するに大局的には正しかったのではなからうか。そして、それならばまた、自由主義を非難した者たちのほうこそ人間性に反逆したことになるのだろうか。

大量の労働者が工場で働くという未知の状況が出現したとき、労使関係のあり方を定める法律が後手に回るのはむしろ当たり前である。存在しない状況について細かな規定を定める法律は存在しない。しかし、法整備が進めば、その後は労働者にも豊かな生活が待っていた。結婚して家族をもち、人口の増大に寄与することができた。21世紀の今日、むしろ失われつつあるそうした可能性に、彼らは与ることができた。それに、市場の調整力は一時的な減退をへてもしばらくすると回復したのに対して、むしろ市場に反する計画こそ長い間経済を維持させる能力がないことが判明したのであった。理論家は歴史については素人同然であることが多い。だから、歴史家を気取って、悲惨な生活が永続したかのような幻想を煽りかねない説明をすることは自重しなければならない。

2008年；アシュトン『産業革命』中川敬一郎訳、岩波文庫、1973年）。ヘッセンの主張を要約しよう。まず、児童労働を資本主義の横暴ととらえることが反資本主義者の常套手段だが、子供は工場主ではなく親に言われて働きに行くのである。そして、親がそうするのは、自分の収入が少ないからである。ところが、児童労働が増すにつれて乳幼児死亡率は減少したし、生産性が上がって親の賃金が増えると児童労働は減退した。大局的にみると、人々は工場の増加で豊かになった。19世紀の悲惨さは、ディケンズ、ブラウニング夫人、サウジーなどの情緒的な創作、およびマルクスやエンゲルスの経済史家を気取った政治文書で喧伝され、彼らはしばしば産業革命前の生産活動をバラ色の光で描き出したが、ロックが1697年に政府商業委員会に提出した報告書は、3歳以上の全児童に繊維工場での労働を勧めている。要するに、人々は、農村にいて食い詰めるより、貧しくても工場で働くほうを自発的に選んだのである。

23) 賃金が低くても、技術革新でその実質的な購買力は大きくなっており、労働者の生活水準は長期的にみて、間違いなく向上してきた。そして、多くの場合、技術革新を推進したのは企業家であった。また、そもそもそれ以前に、古典派経済学の分配論には、賃労働関係で生産された商品の売上が労働者のものであると論証もせずに前提して展開されるという根本的な問題がある。この問題については、村井「グリーンスパンのアイランド・コネクション1」の注22を見よ。

### 3. 道徳哲学や自然法学を基盤に展開されたスミス経済学のオーストリア学派的再解釈

グリーンズパンは講演の最後を『道徳感情論』に言及して終えている。『国富論』に描かれた経済人の人間像が『道徳感情論』と矛盾するか否かという「アダム・スミス問題」はよく知られている。しかし、グリーンズパンは明らかに一貫性を読み取っている。ただ、その理由はおそらくかなりユニークなものであると思われる。

彼は、スミスの『道徳感情論』にふれながら、人間の精神活動における理性の活動領域の局限性に言及している。具体的な箇所を示していないが、おそらく同書の次のくだりであろう。

ところが、道徳基準についての一般的規則の、またそれからつくられる道徳的判断すべての源泉が理性であるのは疑えないとしても、正邪についての最初の知覚が理性から導かれうると考えるのは、おかしなことであり、理解に苦しむ。一般的な規則は個別事例の経験に基づいてつくられるが、これらの個別事例においてさえそうである。この最初の知覚と、それから一般的な規則のもとになるその他の実際の経験すべてとは、理性の対象ではありえず、直接的な感覚と気分の対象である。……

快楽と苦痛は、欲求と嫌悪との目立った対象であるが、それらを区別するのは理性ではなく、直接的な感覚と気分である<sup>24)</sup>。

グリーンズパンはハチスンの名も挙げているが、スミスは上の箇所の直後にこの見解の出所をハチスンに帰しており<sup>25)</sup>、他の学者たちが「最

初の知覚」を理性の仕事とみなしたがるのは、彼の説を知らないか、さもなければ「迷信的な固執」で、この固執は学者の「弱点」(weakness)であるとまで言い切っている<sup>26)</sup>。

ところで、グリーンズパンは、理性以前の能力が受け持つ仕事を「生得的な価値選好」という概念に引きつけているが、スミスは『国富論』においてこうした点を基本視角にしているわけではないので、この説明の進め方には飛躍があることに気づく。実をいうと、グリーンズパンは、『道徳感情論』におけるスミスの基本着想を借りながらも、価値論に関しては、『国富論』における労働価値説をランド経由で吸収したメンガー的、オーストリア学派的な主観的価値説に差し替えて、巨大な規模をもつグローバル市場での自由な交換行為の成立根拠を説明しようとしているのである<sup>27)</sup>。そして、利己主義の追求が他人をも扶助することを、本質的で普遍性のあるメカニズムとして理解しようとしているのである。

1950年代後半に彼はランドの主著『肩をすくめるアトラス』の草稿輪読会に参加し、彼女の思想に共鳴してオーストリア学派の経済学を吸収していくが<sup>28)</sup>、その成果と思われる論文では、ウォール街で1億ドルを超える大口取引がいとも簡単に執行されていることに驚きを表明し、このように株に対する価値選好が行き交う株式市場のおかげで株価が長期で企業価値に収

田耕一訳、京都大学学術出版会（近代社会思想コレクション03）、2009年。

26) スミス、前掲書、348-349ページ。

27) 『道徳感情論』では、この「最初の知覚」をめぐる議論は主に正邪の判断に関して展開されており、財の選好に関してではない。マクロ経済という、より大がかりな問題にこの原理を適用したのは、スミスではなくグリーンズパンであろう。

28) 村井、前掲論文、および続編「グリーンズパンのアイン・ランド・コネクション2——中央銀行を嫌う中央銀行家の肖像」『同志社商学』第64巻第3号、を見よ。

24) アダム・スミス『道徳感情論』水田洋訳、下巻、岩波文庫、2003年、346-348ページ。

25) 「道徳感覚」という語を用いたことに見られるとおり、ハチスンが直接的な感覚の能力を擁護したことはよく知られている。詳細は次を参照。フランシス・ハチスン『道徳哲学序説』田中秀夫・津

斂すると述べている<sup>29)</sup>。ケインズがウォール街の株式取引を「美人投票」云々と表現したことはよく知られている。この喩えは一見洒落ているようにも響くが、実際には実状の曲解に基づいて市場を茶化してみせているだけのお粗末な文章である<sup>30)</sup>。まさしくそのウォール街でプロの投資家を相手に活動してきたコンサルタントとして、グリーンスパンはケインズの軽率な定式化をぴしゃりと脇に退けているのである。1950年代のこうした視線はそのままに、しかし21世紀にはより高等な地位に就くエコノミストとしてより広範囲の取引を視野に入れて、それが安定性をもって進行する様子を「見えざる手の国際版」と表現しているのである。

こうして、グリーンスパンは、利己心に導かれた行為を、ランドのように理性に大幅に依拠した説をとおしてよりは、スミスを援用しながら、理性を行使する前のもっと直観的な、しかし考えようによってはそれだけに説明のつかない能力に信頼する楽観的な説によって、自由市場経済を成り立たせる基盤として賞揚している。言い換えれば、利己心を抱く行為主体が主観的な価値選好をとおして営利を追求する

が、このミクロな利己心の集積を市場が調整することでマクロな均衡をもたらすという構図を、彼は思い描いているのである。そして、彼の解釈で主観効用論者に改められたスミスがこうした点を十分なデータの裏づけ（業界統計や計量分析）もなしに人間の行為の観察のみから正しく定式化したことに素直に敬意を表している。

以上のような論理の筋道をへているだけに、グリーンスパンにとって「アダム・スミス問題」はほとんど問題にならないのである。

#### 4. 為政者自身が振り返る経済思想史

筆者は、この講演がおそらくケインズの「自由放任の終焉」を意識したものだと考えている。

同作は1926年に刊行され、当時までの経済思想における主調音の大局的な推移を、政治思想家を含む数多くの人物を挙げて整理しながら、スミス以来の潮の流れが変わりつつあることを説いたものである。ケインズの考えでは、18世紀以降、一方で所有権論が姿を現し、他方でルソー経由の民主主義とベンサム経由の「功利主義的社会主義」が結合したものが力を得たが、スミス以来の自由主義経済学がこれらを統合した。この結果、私的利益と公共善が調和するとの見方が学問的に完成する。そして、19世紀半ばまでの企業家の自由な活動で生活が豊かになったことで、この思想が正しいことが実際に証明された。ところが、J. S. ミルやケインズのころから自由放任への信頼は薄まり、マーシャルもこの流れを汲んでいる。とはいえ、自由放任の敵である保護主義者やマルクス派の思想の貧弱さが、意図とは正反対に敵の陣営に塩を送ったおかげで、かえって自由主義は維持される。自由主義を尊ぶ保守の伝統があまりに根強いからである。ケインズは以上のように思想史を整理したうえで、こうした伝統に対する批判をこめて「自由放任の論拠とされてきた形而上学ないしは一般的原理は、これをことごと

29) Alan Greenspan, "Stock Prices and Capital Evaluation," in American Statistical Association, *Proceedings of the Business and Economic Statistics Section*, 1959.

30) ケインズ『一般理論』154-155ページ。ケインズは玄人の投資家が素人の行動を予測して投資先を決めるなどというが、大口の投資をする「玄人」がなぜ企業の業績すら調べないのであろうか。そんな投資行動をする人間がなぜ「玄人」なのであろうか。また、「投資」と「投機」を区別するというのも、言葉遊び以上の意味はない。実際に株式市場に投ぜられた100万円なら100万円がどちらかを見分ける方法など存在しない。投資された100万円は株価が上がりすぎても下がりすぎても投機性を招き入れてしまい、投機された100万円で企業が堅調に成績を伸ばせばそれは投資となる。これはまったく自明の理であらう。

く一掃してしまおうではないか<sup>31)</sup>」と提案し、資本主義一般の激しい批判と組合的社会主義の信条を披露したのである。こうして「自由放任の終焉」は、『一般理論』に10年も先だって前述の第2期から第3期への移行を宣言した。とはいえ、ケインズのこの宣言は、どこかしら強引であり、一つの形而上学を別の形而上学から批判したものというべきである。

グリーンズパンもやはり、経済思想史の大局を整理して、第3期から第4期への移行を宣言しているが、そのスタイルは独自である。その理由は、彼が学者ではなく実務家であることに由来する。グリーンズパンのスミス論は、19世紀以上に広範囲でグローバルな規模で展開した自由主義経済を、その中心国の管制高地で金融面からコントロールしてきた人物自身が、自らの事績を歴史的なコンテクストに位置づけながら語る経済思想史なのである。本資料は、こうした特異な意味で、「自由放任の終焉の終焉」とか「自由放任の再定着」とでもいうべき内容になっている。そして、先にふれたとおり、グリーンズパンの著書『波乱の時代』が、この講演がすでに開示していたパースペクティブから書かれているのである。

この点をもう少し詳しく述べてみよう。同書は、中央銀行総裁会議で訪問していたスイスから帰る飛行機の中で初めて9/11の事件を知って遠くの故国や妻に対する懸念と焦燥に苛まれたシーンで始まり、一時的に下降した経済が内心の憂慮に反して回復したことを不思議に思い、その原因を探る物語として展開されている。

アメリカの家庭や企業は、このとんでもない数週間の間は混乱したが、そのあとは立ち直った。いまだかつて見たこともない

ほど経済が柔軟性を備えるようになったのはなぜか、私は自問した。

エコノミストは、アダム・スミスのころからこういう疑問に答えようとしてきた。現代のエコノミストは、グローバル化が進んだ経済を理解するのに悪戦苦闘している。ところが、18世紀に発達した複雑な市場経済に取り組む方法として、スミスは経済学をほぼ一から生み出すしかなかった。私はアダム・スミスには及びもつかないが、いまの時代をこういうものにしていく大局的な諸力が何かを理解することにかけては、彼と同じ探究心を抱くようになった。

本書は、ある意味で一つの探偵小説である。いまから説明を加える必要はあるが、9/11後は新たな世界 (a new world) に住んでいるのだと悟った。それは、グローバルな資本主義経済の世界だが、25年前と比べても、はるかに柔軟で弾力性に富み、開放的で自己回復力に満ち、急速に変化している。……『波乱の時代』とは、この新たな世界の本質をつかもうとする自分なりの試みである。……可能である場合は、自分自身が経験したことの背景に関して自分の見解をはさんだ。そうしたのは、歴史を記録する責任を感じるためである。これによって読者は私が何者かを知るのである<sup>32)</sup>。

このような基本視角から、『波乱の時代』の副題が「新世界における冒険」(Adventures in a New World) とされているのである。こうして著者自らの解題が付されたうえで、同書は、子供時代に始まりランドとの出会いで頂点を迎える著者の思想形成期の回顧をへて、国内の政

31) ケインズ「自由放任の終焉」宮崎義一・伊東光晴編『世界の名著69 ケインズ、ハロッド』中央公論社、1980年、151ページ。

32) グリーンズパン『波乱の時代——わが半生とFRB』(上巻)、19-20ページ。

局を含む経済の推移、さらには訪問経験を踏まえた国際情勢の描写へと進んでいく。そして、ほかならぬその全体が、経済主体の主観的価値選好に基づく行為がグローバルな市場経済の中で展開され、これによって自由主義が安定的に首座に返り咲いたという上述の見方に貫かれている。

ここ25年の物語に一行だけの作品説明を添えるとすると、市場資本主義の力の再発見の物語ということになる。市場資本主義は、1930年代に失敗し、このためその後1960年代までは国家介入が拡大したので、後退を余儀なくされてきた。しかし、徐々に力強さを伴って再び姿を現し、1970年代には本格的に回復し始め、いまでは程度の差こそあれほぼ世界全域に広まるに至った。商業における法の支配が拡大し、特に所有権が保護されるようになったので、世界中で企業家精神が旺盛になった。そしてこんどは、これによってさまざまな機関ができ、それがいまではますます人間の活動を匿名のまま導くようになっていく。これはアダム・スミスの「見えざる手」の国際版である<sup>33)</sup>。

つまり、グリーンスパンは次のように考えたのだ。すなわち、この混沌とした世界を雑然と説明してもあまり意味はないので、混沌の中に

論理の一条の光を見出したいが、スミスが当時の世界に関してそのよき先例を示してくれているので、自分はそれに倣って現代世界の混沌をうまく整理して描き出していこうと。ここで彼が、80歳を過ぎて公刊したデビュー作(!)に「探偵小説」としての横顔をもたせようとしていること、またこの探偵がどのような考え方をもつ人物で、それに従ってどのように「新たな世界」を泳ぎ回ったかを知ってもらうことで、読者にその世界の様子がよりよく伝わりと考えているらしいことも興味を引く。そして、同書の核となる基本視角をスミスに託して構成する彼が、同書よりもスミス以前も以後も含めて経済学史について詳細に述べたのがこの講演なのである。このような意味で、本資料は為政者自身が振り返る経済思想史であるといえる。

もっとも、ゆっくりとだが確実に満ちてきた自由主義の潮も、この講演のすぐあとに起こったサブプライムローン危機以降、挑戦を受けている。これを受けて、中には資本主義が崩壊したとか、もう資本主義は終わったなどと（「資本主義」の定義さえせずに）意味不明なうわ言を口にする専門家すらいるのには驚かされるが、2012年現在、世界の支配的な経済システムは資本主義以外の何ものでもない。資本主義より優れた経済システムなど誰も発明できていない以上、それが「崩壊」したり「終わった」りすることは実質的にありえないことを肝に銘ずるべきであろう。資本主義は恐慌ぐらいで「終わる」ようなものではない。その後グリーンスパンは、思わぬ規模でのバブルの崩壊劇に驚きを表明することになるが、とはいえ、自由主義と市場経済の進展自体を疑うという姿勢は示していない。

## おわりに

以上に詳論してきたとおり、グリーンスパンのスミス論は、スミスという素材を現代の研究

33) グリーンスパン、同上書、25ページ。いうまでもないが、もともとスミスは「見えざる手」という語を『国富論』では第4編（貿易がテーマ）で用いたから、「見えざる手の国内版」のようなものを想定するのは不自然である。ただ、グリーンスパンの意図としては、地球全体を巻き込み、スミス時代をはるかに上回る広がりをもった市場での取引が、単純で前理性的な要素を含む利益動機に突き動かされているのに安定していることが壮観だと言いたいのであろう。

水準の大局を踏まえて消化しながらも、多くの点で現代経済に引きつけて理解しようと試みるものであり、つまりは思想工学の成果を詳細にはないとしても利用するとともに経済史の理解も踏まえ、スミスの基本視角を借りつつグローバル経済を理解しようとしている。そして、スミス経済学を、レッセフェールのもとでの市場の調整力に対する信頼を表明した点で今なお古びていない思想とみなしている。このことによって本資料は、経済工学者がそれを思想工学と有効に結びつけた試みとして評価できる。

最後に、以上でふれなかったが注目に値すると思われる点を補足して結びとしたい。それは、平均寿命が延びたことに何度か重ねてふれていることである。彼のキャリアを見ていくと、東欧系移民の2世として中間層の家庭に生まれるが、両親の離婚で母に女手一つで育てられ、高校卒業後ジャズマンになり、大学には進んだが大学院では博士論文を完成せずにドロップアウトし、シンクタンクでコンサルタントをしながら

ランドの警咳に接し、彼女の思想に靈感を得てオーストリア経済学を学び、こうした経験を踏まえてワシントン入りし、還暦を過ぎてからFRB議長となって金融政策の世界記録を樹立している。そして、この講演を行ったのも、78歳のときであった。産業革命期に生まれていたら、彼のような家庭環境とキャリア形成をへた地味な若者が世界的な仕事を成し遂げる可能性はほとんどなかっただろう。グリーンSPANは、自らの生涯を振り返ったとき、歴史に名を刻む業績を遺せたことの少なからぬ部分が啓蒙期以来の自由主義の進展のおかげであると考え、この思想の発展に最も貢献した人物であるスミスに素直に謝意を表しているのである。スミスに「決して返しきることのできない借り」を負っているという結びの言葉は、来し方を振り返りつつ感慨をこめて吐露された、混じり気なき真情であると筆者には思える。